

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

ノルウェーにおける先住民族サーメの言語教育と文化伝承  
—ハットフェルダル・サーメ学校に焦点をあてて—

氏 名

長谷川 紀子

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、ノルウェーにおける先住民族サーメのための学校教育の展開と今日的課題を、南サーメ地域のハットフェルダル・サーメ学校に焦点をあてて明らかにすることである。特に、サーメの言語教育や文化伝承のために、「学校」という存在がいかなる役割を果たしているのかを中心的な分析の視点とする。

本論文は、序章、第1章から第5章、終章から構成される。以下、各章の概要を示す。

序章では、先住民族サーメの居住地域や人口構成、民族言語の分布の特徴を概観したうえで、問題の所在と本論文の課題を示した。ノルウェーでは、サーメのための教育が法制面で整備されており、学校教育においてサーメ語やサーメの文化に関する教育を提供することが保障されている。ただし、地理的に分散して居住するサーメの状況は多様であり、サーメが居住する地域固有の歴史や文化的特徴に着目した研究が必要である。本論文が対象とする南サーメ地域は、他の地域に先がけてサーメのための学校設立運動を展開し、同国で最初の国立寄宿制サーメ学校をハットフェルダルに設立した地域である。以上から、南サーメ地域のハットフェルダル・サーメ学校を本論文の主な考察対象とする根拠を示した。

第1章では、18世紀初頭から戦後にいたるサーメ地域の教育の歴史的展開を考察した。具体的には、第一に18世紀初頭のキリスト教布教期、続く19世紀後半以降の同化政策期に、教会学校や民衆学校の設立が、各サーメ地域に与えた影響を明らかにした。次に、民主的福祉国家を目指した戦後のノルウェーが実施した、サーメに対する段階的な法整備の過程を考察した。同時に、サーメによる1970年代以降の民族的権利復権運動の展開、サーメ組織および教育・研究機関の創設、国境を越えた先住民族運動との連携など、サーメによる活動の展開、そしてサーメ自身の意識変化の過程を明らかにした。

第2章では、現代のノルウェーにおけるサーメ教育を概観することを目的に、各教育段階におけるサーメ教育の現状と地域的な特性を描き出した。特に、北サーメ地域と南サーメ地域の間にみられる、基礎学校における教育環境の差異を明らかにした。考察から、北サーメ地域では基礎学校で充実したサー

メ語教育が提供されているのに対し、南サーメ地域ではサーメ語教育が十分に保障されていないこと、そしてこのような差異が生ずる背景には各地域のサーメの居住分布や生業の特徴などが影響していることを明らかにした。

第3章以降は、本論文の主要な考察対象である南サーメ地域に焦点をあてた考察を行った。第3章では、同国で最初に国立寄宿制サーメ学校が設立されたハットフェルダルの地域的特徴と、同サーメ学校設立から現在に至るまでの経緯、学校運営の歴史の変遷について考察した。同校は、同化政策期に南サーメ地域から沸き上がったサーメのための公立の学校の要求運動が発端となり、戦後、国立の寄宿制サーメ学校として設立された。本章では、学校設立までの経緯、同校におけるサーメ語・文化教育の段階的発展、さらに、社会変動や国の教育方針の転換による、1990年以降の学校方針の変容を明らかにした。

第4章では、2011年以降、通年制をとらなくなったハットフェルダル・サーメ学校の現状を、現地でのフィールド調査をもとに民族誌的手法を用いて考察した。同校は2010年までは通年制であったが、通年制を希望する生徒の減少にともない、2011年以降は遠隔教育と年間6週間の短期セミナーという形態により教育を展開している。遠隔教育は、スカイプにより個別に南サーメ語を学ぶ学習方法であり、近年、受講者の国境を越える居住地域の広がりを受講者数の増加がみられる。考察から、新たな需要を満たす遠隔教育による南サーメ語教育の可能性が見いだされた。一方、短期セミナーは、通常は地元の学校に通うサーメの生徒が、年間6週間、同校に寄宿して受講する形態をとる。短期セミナーを通して生徒が、教師やスタッフ、地域のサーメとの触れ合いを通して、南サーメ語やサーメ文化に触れ、参加年数を重ねる度に、サーメという民族性を自身のアイデンティティの一つに内在化し成長していく過程を明らかにした。

第5章では、第一に、前章で考察した遠隔教育と短期セミナーの課題を考察した。遠隔教育に関しては、機器の精度の問題に加え、生徒と教師が直接対面しないことによって生ずるコミュニケーションの困難という課題とともに、スウェーデンに居住するサーメの受講者数が近年急速に増加している実績を考慮しない国の評価に対する学校側の葛藤などが明らかになった。短期セミナーに関しては、受講者確保の課題がみられた。その背景として、同セミナーの教育方針をめぐる教師や保護者間の対立、トナカイ文化に偏りがちな教育内容に対する一部の保護者の不満、サーメの生徒が居住する各コムーネや公立学校側が短期セミナーへの生徒の参加許可に制限を設ける実態などが明らかになった。第二に、ハットフェルダル・サーメ学校の「学校」としての課題を考察した。寄宿制に関しては、近代化に伴うサーメの生活や親の意識の変化などにより、今後、通年で通う生徒を確保できる可能性はきわめて低い。教育内容に関しては、トナカイ放牧を中心とした伝統的なサーメ文化が色濃く、教師やスタッフもトナカイ放牧業の出身者が多いことから、サーメ＝トナカイ放牧という一面的なサーメのステレオタイプが助長される傾向にある。考察から、これらの要因が生徒数の減少に影響していることを明らかにした。一方、「学校」としての存続の意味を改めて問い直す出来事があったことも考察から明らかになった。2015年10月、ノルウェー政府は、同校の閉校を決定した。しかし、サーメからの働きかけにより、2016年3月の議会で前回の決議は撤回され、国の予算削減とコムーネやサーメ議会による同校への援助という条件付きで同校を存続させる再決議が打ち出された。この一連の出来事から、同校は普通教科を教える通年制の学校ではないが、サーメは同校を、「ノルウェー国民としてのサーメ」が、「国によって保障された正当な権利としてのサーメ教育」を受けられることのできる国立の「学校」であることに意義を見出していることが明らかになった。

以上の考察から、本論文の結論として次の3点が導き出された。

第一に、ノルウェーのサーメは、先住民族としてサーメ教育を受ける権利が「学校」で保障されている。特に南サーメ地域は、サーメ自らが学校設立運動を起こし、サーメのための学校設立を実現させた歴史的経緯がある。本論文の考察から、サーメの学校関係者は、単に教育の権利を主張しているだけでなく、サーメ語・サーメ文化教育を行う「学校」を通して、サーメが国民としての権利を平等に有する先住民族であることを主張している。

第二に、国の保障のもとにサーメ教育が行われる「学校」であるからこそ、生徒たちは肯定的に南サーメ語やサーメ文化を捉えている。近年、南サーメ語を流暢に話し、南サーメの問題を自分達の問題として考え、語ることのできる若者が現れている。これらの若者は、学校教育を通してサーメ語やサーメ文化を学習した背景をもつ。このことから、先住民族サーメであることに対する肯定的なアイデンティティの形成は、学校での学習経験によるものが少なくないと考えられる。この意味において、ハットフェルダル・サーメ学校が「学校」であることの意味は重要である。

第三に、ハットフェルダル・サーメ学校は、南サーメの伝統的なコミュニティに代わり、サーメの知恵や文化を伝承していく役割を担っている。南サーメ地域は、伝統的なコミュニティがすでに消滅しつつある状況にある。そのような状況のなかで「学校」は、伝統的なサーメの家族関係やサーメ・コミュニティの機能を代替する役割をもっており、「学校」での活動を通して、サーメ言語やサーメ文化が伝承されている。

最後に終章では、本論の総括を行い、今後の研究の課題を整理した。

